研究ノート

開発に関わるバングラデシュ社会の問題とその歴史的背景
―東ベンガルの社会形成史―

須田　敏彦（大東文化大学国際関係学部）

Development Issues of Bangladesh Society and Their Historical Backgrounds
-History of Social Formation of East Bengal-

Toshihiko SUDA

1. はじめに

バングラデシュは、国土面積は14.7万㎢と日本の4割弱ながら人口およそ1億7000万人(2020年)を抱える世界有数の人口大国である。このバングラデシュとインド・西ベンガル州（以下、西ベンガルとする）からなるベンガルは、かつてインド亜大陸だけでなく世界の中で極めて豊かな地として様々な人から賞賛されてきた(注1)。そこで作られる米は東南アジアやモルディブなどまで輸出され、15世紀に始まる大航海時代に入ると綿や絹の織物は、ポルトガルやオランダ、そしてイギリスなどの商人を介してヨーロッパや江戸時代の日本など世界各地に輸出された(注2)。当時、ベンガル、特にダッカ（ダカ）は、世界の工場ともいえる地だったのである。このベンガルの豊かさに目をつけ、インドの外からやってきた侵略者たちは競ってベンガルを支配しようとした。16世紀に中央アジアからインドに来た侵入者が建てたムガル帝国は、ベンガルの富を使ってインドでの支配域を広げようとし、18世紀中葉からほぼ200年間インドを植民地支配したイギリスがもっとも重視し長く都を置いたのも、ベンガルだったのである。

しかし、かつて豊饒の地であったベンガルは、現在はアジアの中では最も貧しい地域の一つといって過言ではない。特にバングラデシュは、アジアの貧困を語る際の代名詞的な存在でさえある。こうした中で本稿の目的は、貧困を始め現在バングラデシュの社会が抱えている様々な問題は、どのような歴史的背景の中で生まれてきたのかを整理することである。それは、現在の課題を解決する上で、諸問題がなぜ、どのように生まれたのかを理解することが解決の方法を探すことに役立つと考えるからである。もちろん、過去を変えることはできないし、問題の原因が明らかになれば解決策がすぐに見つかるわけではない。しかし、変えることができない伝統や慣習、あるいは神の意思だと信じられていることも、その成立の背景や経緯を明らかにすることで相対化し、改善できると考えるのである。

本稿で述べられることは、ほとんどが既存の文献に書かれていることで、情報そのものにオリジナリティがある訳ではない。本稿のオリジナリティは、現在のバングラデシュの社会が抱える問題の根源を、その生成過程を振り返りながらコンパクトに整理する、という構成にあるといえよう。こうした構成を選んだのは、筆者が歴史家ではなく、主に社会経済の現状分析に携わる研究者だからである。本稿の課題は、バングラデシュが現在抱えている問題は、なぜ、どのように生まれたのか、という問いにコンパクトに答えることである。そのため、本稿の主な読者として期待しているのは、バングラデシュの現状や将来に関心がある学生や研究者、そして社会経済開発に関わる実践家である。本稿が対象とするベンガルやインドの歴史に関しては、本稿が遠く及ばない優れた研究が日本にも厚く蓄積されているが、現状分析を主に行っている筆者のこの小稿にも、一定の価値があることを期待している。

本稿では、まず、第 2 節の「バングラデシュの形成史」で、バングラデシュの地理的特徴および民族や言語、宗教などがどのように形成され変容したのか、そしてバングラデシュという国家が成立した経緯を簡潔に整理する。そして第 3 節で、現在バングラデシュの開発において重要な克服すべき課題となっている諸問題、すなわち人口の過剰と貧困、工業化の遅れ、女性の地位の低さ、そして初等教育の遅れがどのようにして生まれたのか、簡潔に論じる。第 4 章は、まとめである。

なお、本稿は、現在のバングラデシュがパキスタンの一部としてイギリスから独立するまで、すなわち 1947 年 8 月までを対象として扱う。現在のバングラデシュが抱える問題の多くは、パキスタン時代、そして 1971 年にバングラデシュとして独立した後の政府にも大きな責任があるのだが、それは別稿で論じる予定である。なお、本稿は主にバングラデシュを対象にして論じているが、本稿の議論はほぼインド・西ベンガル州にも通じるものであり、また多くはインド全体にも通じるものであることを記しておく。

第 2 節　バングラデシュの形成史

(1) 地理的特徴

現在バングラデシュになっている地域の大半は、ガンジス川（バングラデシュではパドマ川あるいはポッダ川と呼ばれる）とブラフマプトラ川（同じく、ジョムナ川）、そしてメグナ川という三つの大河が作った世界最大のデルタ（三角州）の上にある（Rashid 1991, p.1）。この三つの川は、インド・オーストラリアプレートに乗って北上してきたインド亜大陸がユーラシア大陸と衝突してできた世界で最も高いヒマラヤ山脈などの山脈や台地に源を発する川である。雨季のモンスーンによって海から水蒸気となって運ばれた大量の水がこれらの山脈や台地に降りそそぎ、それがこれら 3 大河川となってベンガル湾に流れ込む。これらの河川は、大量の水と共に、大地から削り取られた養分豊富な大量の土砂を下流に運んでくる。これらの三つの川の流域面積はバングラデシュの国土の 10 倍以上にもなり（Van Schendel 2009, p.4）、国外から運ばれてくる大量の土砂により河口部に肥沃な新しい土地が次々と形成されていく。こうしてできた沖積平野に作られた国が現在のバン

グラデシュなのである。

バングラデシュは北緯20度34分と26度38分の間にあり1年を通して温暖な気候である（BBS 2016, p.7）。年間降水量は2400㎜と多く、人の手が入らなければ、国土の大半は熱帯林が厚く大地を覆う地域である。冬季は乾燥しほとんど雨が降らないが、6―9月の雨季には大量の雨が降り、稲作に適した気候となる（BBS 2016, p.9）。

雨季になるとバングラデシュの国土の3分の1は毎年冠水する（ジョンソン 1986, p.37）。このような低地では、人々は河川で運ばれた土砂によって川沿いに作られる高台（自然堤防）に家を建てたり、平らな土地に土を盛ってその上に家を建てて住んでいる。屋敷地用の盛り土を得るため掘った穴は池として使われる。池は、生活用水や灌漑用水を得たり、沐浴をしたり、魚を飼ったり、周囲の土手で竹や果樹、野菜など有用な作物を育てるなど、様々な目的で有効活用される（吉野 2013）。

大河が作る平坦で低湿な土地で主に稲作を行い、自然堤防や人工的に作った高台に家を建てて住み、豊富な水で育つ魚を主な動物性蛋白源として活用する、というのが、伝統的なベンガル人の生活スタイルである[注3]。

(2) ベンガル民族とバングラデシュの成立過程

次に、バングラデシュ人の大半を占める「ベンガル人」という民族がどのように形成されたかを簡潔に整理しておこう。また、ムスリム多住地域であるベンガルの東半分（東ベンガル）がどのような経緯で独立国家バングラデシュとして建国されたのか、それについても簡潔に整理しておこう。

ベンガル人のルーツ

バングラデシュ人の99％を占める圧倒的多数はベンガル人という民族である[注4]。ベンガル人は、インド＝ヨーロッパ語族に属するベンガル語を母語とし、歴史の中で形成されたベンガル人としての一体性を感じている人々の集団である。ここでは、まず彼らが人種としてどのような人たちなのか、その形成の過程を振り返ってみよう。

現在考えられているのは、ベンガルが人種のるつぼと呼ばれるにふさわしい場所で、様々な人種や民族が異なる時期に多方面から来て混血した結果、現在ベンガル人と呼ばれる人々が生まれたということである。ベンガル人の祖先で最初にこの地に西方から来たのは、オーストラリア先住民のアボリジニやマレーシアの先住民などと同系統の肌の色が濃いオーストラロイド系の人々だと考えられている。その後、モンゴロイド系の人々が東方から入り込み、北西インドでインダス文明を作ったと考えられ現在南インドに多いドラヴィダ系の人たちも流れ込んだ。そして、中央アジアにいた肌の色が薄いアーリア人が紀元前1500年ごろインド北西部に侵入すると、先住民と混血しながら長い時間をかけて拡散し、ガンジス川下流域のベンガルにも及んだ。こうして何度も混血を繰り返した結果生まれてきたのが、ベンガル人の祖先なのである[注5]。

その後、13世紀初頭にアフガニスタンからトルコ系のムスリム勢力が北西インドに侵入し王朝を開くと（1206年）、トルコ人やアフガニスタン人などインド亜大陸の外部から侵入したムスリム

諸勢力がベンガルを支配する時代が 18 世紀後半までおよそ 550 年続いた。この間に、トルコ人、アフガニスタン人、ペルシア人、アラブ人などがベンガルにやって来て定着し混血が行われた。しかし、インドの外から来たムスリムを祖先に持つ人はベンガルでは非常に少ない（注 6）。

16 世紀に建国されたムガル帝国に始まる東ベンガルの積極的な開拓時代には、インド内外の各地からきた人々がベンガルに入植し、混血した。また、16 世紀以降、ポルトガル、オランダ、イギリス、フランスなどからヨーロッパ人が交易のためやって来るようになった。ポルトガル人の中には現地の女性と結婚して定着する人も多くいた。さらに、ベンガルではイギリス（初めは東インド会社、のちにイギリス政府）による植民地支配が 1765 年から 1947 年まで行われるが、こうした過程でヨーロッパ人とベンガル人の混血がある程度行われた。

以上をまとめると、現在のベンガル人の多くは、オーストラロイド、モンゴロイド、ドラヴィダ人、それにアーリア人の遺伝的要素を強くもつ。また、トルコ人、アフガニスタン人、ペルシア人、アラブ人、ヨーロッパ人などの遺伝的要素が加わった人もいる。このような多様な起源をもつ人々の集合体が現在のベンガル人であるといえよう。

また、忘れてならないのは、現在のバングラデシュには、ベンガル人以外の民族も、少数だが暮らしていることである。2011 年のセンサスによると、バングラデシュには 159 万人、全人口の 1.1% の少数民族（非ベンガル人）が、主に南東部のチッタゴン丘陵地帯で暮らしている（注 7）。

ベンガル民族の成立

ベンガル人は、ベンガル語を母語とする民族である。このベンガル語は、いかにして生まれたのだろうか。ベンガル語はヨーロッパの諸言語やペルシア語と同じくインド・アーリア語族に属する言語である。現在主に北インドで話されるヒンディー語やウルドゥー語、パンジャビー語などと同じく、紀元前 1500 年頃インド北西部に侵入したアーリア人の言葉が、ドラヴィダ語など先住民の言葉を吸収し発展してできた。

アーリア系言語のベンガルへの普及は、政治の動きと深く関係している。インドにおけるアーリア人の拡散にともないガンジス平原の中流部、現在のビハール州を拠点としたアーリア系のマガダ国が強大になり、前 4 世紀に成立したマウリヤ朝の時代にはベンガルを含むインドの大半がマウリヤ朝の版図に組み込まれた。この時代ベンガルに住んでいた人々はまだ非アーリア系の言葉を話していたが、マガダ地方で話されていたアーリア系言語の口語が、ベンガルでも公用語として使われたのである（注 8）。

ベンガル特有の言語であるベンガル語が成立した時期については諸説あるが、一般に、8 世紀にベンガルを統一し一時インド北西部まで版図を広げたパーラ朝の時代に、首都が置かれていたマガダ地方の言葉が基礎になって成立したと考えられている（注 9）。パーラ朝は 4 世紀にわたって続き、仏教を基盤とした文化が栄えるなどベンガルの黄金時代とされる。ベンガルを基盤とした統一政権ができたことで、域内の共通の言語、共通語としてベンガル語が生まれた。当初は支配層、エリートの言葉だったが、長い時間をかけてベンガルで暮らす人々が使う様々な非アーリア系言語（アウストロアジア語族、チベット・ビルマ語族、ドラヴィダ系の言語）に置き換わりベンガルに暮らす

人々の共通の母語となって「ベンガル人」を作り出しながら、広まっていったのである[注10]。

その後、13世紀初頭からベンガルではトルコ人の王朝を中心としたムスリム支配が始まるが、長い間ベンガルは独立した国であり続けた。そして、ムスリム支配の間、宮廷語としてペルシア語も使われたが、一般の人々の間ではペルシア語やアラビア語の語彙を吸収したベンガル語が話された。ベンガル文学も盛んになり、独自のベンガル文化が発展したのである（*Banglapedia* “History”、堀口 2009）。

東ベンガルにおけるイスラーム化の進行

13世紀初頭、アフガニスタンから侵入したトルコ系ムスリムの支配がベンガルでも始まり、以後、王朝は交代しながら、イギリスの植民地化が始まる18世紀半ばまで、およそ550年ムスリム支配が続いた。そして2011年現在、バングラデシュで国民の90%がムスリム、9%がヒンドゥー教徒、その他（キリスト教徒や仏教徒）が1%という宗教構成になっている。一方、西ベンガル州では、ヒンドゥー教徒が71%と多数派で、ムスリムは28%と少ない。現在西ベンガルではムスリムの割合が少なく、バングラデシュで多いのはなぜだろうか？南アジアの歴史を専門とするイートンは、それは16世紀に始まったムガル朝時代に、当時未開のジャングルに覆われていた東ベンガルに入植した多くの非ムスリム（ヒンドゥー教、アニミズムの信仰者など）の農民が、集団でイスラーム（イスラム教）に改宗したからだという（Eaton 1993）。

ベンガルだけでなく、インドを支配した歴代のムスリム政権は、初期の侵略時など時には在来宗教の仏教やヒンドゥー教を厳しく弾圧したが、全体としてみると在来の宗教に非常に寛容的であった。改宗を強制しなかっただけでなく、むしろ、支配者としての自分たちの権威を守るため、現地人の改宗に消極的でさえあったという。ムスリム政権の都が置かれることが多かった西ベンガルでムスリムが少ないのはこのためだという。

一方、東ベンガルでは、ムスリム人口、特にムスリム農民がムガル帝国時代に急増し、多数派を占めるようになる。ムスリムの農民コミュニティーが東ベンガル中央部のダッカ地区で初めて報告されたのは、ムガル帝国のベンガル支配が始まって間もない1599年だという。その後、1630年には南東部のノアカリで、1660年には北部のロングプールでムスリム農民の存在が報告されるなど、17世紀に農民の急速なイスラーム化が東ベンガルで進行した。

その背景には、それまで厚い森林が広がっていた低湿地帯の東ベンガルで、ムガル帝国の時代に政府が採った積極的な開墾奨励政策により、入植者による森林の開墾と水田への転換が行われたことがある[注11]。積極的な征服戦争によりインドで版図を拡大していた初期のムガル帝国には、税収の増加によって巨額の戦費を捻出する必要があった。そこで目を付けたのが、当時未開墾地が多かった東ベンガルである。そこを開墾し稲作を奨励することで、地税、すなわち国家歳入の増大を図ったのである。

そして、その開墾を実際に現場で指導したのは、アラブ地域やペルシアを含むインド内外の各地域からやってきたムスリムの指導者（ピール、カジ）であることが多かったとイートンはいう[注12]。また、彼らの多くは神秘主義的な宗教家（スーフィー）であった。ジャングルの猛獣や病気な

どの危険から開拓労働者や入植農民を守る超自然的な力を持っていると信じられたのである。入植に当たって、入植の指導者がムスリムである場合はモスクを、ヒンドゥー教徒である場合はヒンドゥー寺院を入植地に作ることが政府によって義務付けられていて、そこが入植者の生活の中心となった。入植者の多くは、この地方にもともと住む十分にアーリア化されていない部族民やヒンドゥー教の低カーストに属する人々であった。彼らは、ヒンドゥー教の枠組みの中では、最底辺の社会集団として厳しい差別の下におかれていた（注 13）。それに対してイスラームの教理は、神の前では人間は平等であるというものであり（注 14）、神秘的な力を持つと信じられたムスリム指導者に従って働き、モスクを生活の拠り所として共に暮らすうちに、イスラームを受け入れていった。これが、イートンが考える、東ベンガルの農村部でイスラーム化が進行した経緯である。イートンのこの考えは、現在、東ベンガルにムスリムが多いことを説明する通説となっている（注 15）。

ムスリムとヒンドゥー教徒の対立の始まり

こうして東ベンガルでは、住民の大多数が住む農村部でイスラーム化が 17 世紀以降に急速に進んだ。そのことが、ベンガル人という同じ民族が暮らす土地であるにもかかわらずベンガルがその後ムスリム多住地域とヒンドゥー教徒多住地域の二つの国に分かれることにつながるのである。

農民を始め多くの民衆がヒンドゥー教からイスラームに改宗したとはいえ、多くの人にとって、イスラームとヒンドゥー教の違いはあいまいであった。ヒンドゥー教徒がスーフィーなどムスリムの聖者やその墓を崇拝したり、ムスリムがヒンドゥー教の神を信仰したりバラモンの祭式に参加したりするなど、二つの宗教は融合・習合していたのが実態であった（注 16）。その理由の一つは、イスラームへの改宗運動を担った開拓指導者の中に、スーフィーと呼ばれる神秘主義者が多かったことである。彼らの信仰は汎神論的で呪力を崇拝しており、ヒンドゥー教と共通点が多い。ヒンドゥー教も多神教であり、呪術的な力を持つと信じられていたスーフィーやイスラームの神などを信仰することを、当時のヒンドゥー教徒の多くは特に問題だと感じなかったのである（注 17）。

このようなイスラームとヒンドゥー教の間の親密な関係が変わり、両者の間の違いが強く意識され互いに排他的になっていくのは、イギリスによる植民地支配が始まった 1765 年以降、特に 19 世紀以降のことである。この時、イギリス支配に抵抗する形で、また、キリスト教宣教師が広めた思想的な影響により（注 18）、イスラームとヒンドゥー教の双方で、聖典（ヒンドゥー教はヴェーダ、イスラームはコーランやハディース）への回帰を目指す原理主義的な運動が始まった。その結果、ムスリムはヒンドゥー教的な慣習を、ヒンドゥー教徒はムスリム的な慣習をやめ、自らの聖典に忠実に従い自らを宗教的に純化することを目指すようになった。これは、イスラームにおいてはワッハービ運動（注 19）、ヒンドゥー教においては、ヒンドゥーナショナリズム（注 20）、などと呼ばれる。

こうした宗教の純化や、他の宗教に対し自らの優位性を主張する排他的な宗教運動は、当初はイギリス支配への抵抗として行われたものだった。しかし、分割統治政策によりイギリスがインドの勢力同士を反目させるように仕向ける中で、ヒンドゥー教徒とムスリムは互いに敵対するようになる。

ムスリム国家パキスタンの建国とバングラデシュの独立

イギリス支配への反発が強まるなかで、19 世紀後半からイギリスはインドの独立運動を抑えることが次第に困難になり、1947 年、ついにイギリス支配は終焉を迎えることになる。それを前にして、イギリスが去った後の新たな国家の主導権をめぐってヒンドゥー教徒とムスリムの間で対立が急速に高まった。当時の独立運動を担う中心的な存在だった国民会議派のガンジーやネルーなどは統一インドの独立を望んだが、それは、統一インドの中では少数派になるムスリムにとって受け入れ難い選択肢であった。

そこで、ムスリムが多数派を占めるインド北西部とガンジス川下流部（ベンガル）に、ムスリムが中心となる国家、パキスタンの建国を求める声がムスリムの間で高まった。その結果、ヒンドゥー教徒とムスリムの間の溝は深まった。1946 年 8 月にカルカッタで暴動がおこり、ムスリムとヒンドゥー教徒の双方で犠牲者 4000 人にのぼる殺し合いがおきた[注 21]。こうして、分離独立が避けられない状況になった。そして、犠牲者 50 万人とも 100 万人ともいわれる独立時の大混乱を経て、1947 年 8 月 14 日、ムスリムが多数を占めるパキスタンが成立し、東ベンガルはその一部となった。その翌日インドが独立し、西ベンガルはその一部となった。

しかし、ムスリムが圧倒的に多数を占めるパキスタンも、ベンガル人ムスリムにとっては安住の地ではなかった。パキスタン建国後のことは本稿の射程外であるが、以下、ごく簡単にバングラデシュ独立の経緯をまとめよう。パキスタンでは当初この地域のムスリムの共通語とされるウルドゥー語のみが国語とされ、ベンガル語も国語にするという東ベンガル（東パキスタン）の要求はなかなか受け入れられなかった。これは、ウルドゥー語を母語とせず、ベンガル語に誇りをもつベンガル人の間で大きな反発を生んだ。また、自治への要求は認められず、政府の要人や官僚、軍隊などに西パキスタン出身者が多いなかで、東ベンガル（東パキスタン）は、西パキスタンの植民地といってもよい状況となった。経済的にも西パキスタンに比べ劣位に置かれ、東西パキスタンの間の格差は拡大していった。こうしたことに対するベンガル人の不満が爆発し、1971 年パキスタンからの独立を宣言し、激しい独立戦争の末、バングラデシュ（ベンガルの国）人民共和国として独立を勝ち得たのである（加賀谷・浜口 1977）。

第 3 節　バングラデシュが抱える社会経済問題とその歴史的背景

以上駆け足で見てきた経緯により、バングラデシュの社会と国家は今のような形になった。この節では、バングラデシュが社会経済において抱える重要な問題が、どのようにして、なぜ生れてきたのかを整理しておこう。

(1) 人口過剰と農民の貧困

現在のバングラデシュが抱える最大の問題は貧困であるといってよいだろう。近年急速に経済が成長しているとはいえ、今でも一人当たりの GDP は 1749 ドルにすぎず（2018 年）、世界 192 カ国

中 149 位という低水準である（IMF）。こうした貧困の主要な原因の一つは、就業者に占める農業従事者の割合が 45.1％（2013 年）と大きい一方で、人口過剰により農家の経営面積が極めて小さく（平均 0.6ha：2008 年）、また、自分の農地を十分持たず他人の農地で雇われて働く農業労働者世帯が多いことである（全農村世帯に占める農業労働者世帯の割合は 34.4％：2008 年）。かつて大量に輸出されていた米も不足し、毎年数百万トンの食用の穀類（小麦と米）が輸入されている。こうした状況は、なぜ、いつから生じたのだろうか。

人口増加による農地不足の発生

ベンガルの地がかつて農業生産物であふれ、その豊かさはかつて中国人の玄奘（げんじょう）、モロッコ人のイブン・バットゥータ、フランス人のベルニエらに絶賛されたこと、またベンガルがムガル帝国の繁栄を支え、その豊かさゆえにイギリス支配のための首都がおかれたことは、すでに見た通りである。そのベンガルが貧しく、大量の食料を輸入するようになった最大の理由は、開墾のフロンティアが 19 世紀末に消滅した後も人口が増え続け、農地が細分化されていったことである。現在バングラデシュで最も人口密度が高いベンガル南東部で、イギリスの植民地支配初期の 18 世紀末に多くの未開地があったことは、1798 年に現在のチッタゴン管区（コミラ県、ノアカリ県、チッタゴン県など）の農村部を視察した英国人ブキャナンの報告書（Buchanan 1992）に詳しく記されている。現在この地に開墾可能な森林などはほとんど残されていないが、当時は、開墾されたばかりの土地や、まだ開墾されていないジャングルや草地が至る所にあったことが報告書から読み取れる。

ベンガルの人口は、ムガル帝国初期、積極的な入植が始まったばかりの 1600 年には 900 万人ほどであったと推定されている。現在（2020 年）ベンガルの人口はおよそ 2.7 億人（バングラデシュ 1 億 7000 万人、西ベンガル州 1 億人）なので、わずか 30 分の 1 にすぎない。その後人口はゆっくりと増えていったが、ブキャナンが現在のバングラデシュ南東部を旅した時（1798 年）の人口は 1450 万人（1801 年）程度であったと推定されている。東ベンガルではこの後も森林の開墾は続き、デルタ河口部だけでなくラジシャヒ、ディナジプール、マイメンシンなどベンガル北部などでも開拓が進められたのである。人口増加率は、1920 年頃までは年率 0.6 ～ 0.8％程度と緩やかだったが、着実に人口は増加した。1901 年の人口は 2890 万人と推定されている（M. Ataharul Islam 1992）。

そして、19 世紀末までに開墾可能な未開地はほぼなくなり、人口は過剰な状態になった。農民一人当たりの土地の耕作面積が縮小し貧困化が進むとともに、開墾可能な土地を求めてベンガルの外へ農民が移住することが、19 世紀の末ないし 20 世紀の初めごろに始まるのである。ベンガルの中でも地域によって主な移住先は異なり、ディナジプール、マイメンシンなどベンガル北部からは北隣のアッサムやクーチビハールへ、コミラやノアカリなど東部からはトリプラへ、チッタゴンなど南東部からはビルマのアラカンへ主に向かった（注 22）。

さらに、1920 年頃から天然痘や結核、マラリアやコレラなど致死性の高い病気に対するワクチンや治療薬がベンガルにもたらされると、死亡率が大きく低下した。この後、人口はそれまでにないスピードで増加していく。それに伴い食料が不足するようになり、1920 年代には、イギリスの支配下で大規模な開墾が始まったビルマ（ミャンマー）から米の大量輸入が始まり、ベンガルは米

の輸出地域から輸入地域に転落した。このように開拓のフロンティアが消滅した後で人口が急増したことが、ベンガルの貧困と食料不足の大きな原因である。

永代ザミンダーリー制度の影響

ベンガルの農村に深刻な貧困をもたらしたもう一つの要因は、イギリス植民地時代に導入された永代ザミンダーリー制度と言われる土地制度である。これは、イギリスの植民地化以前、ムガル朝時代からいた地税徴収人のザミンダール（「地主」の意味）を土地の所有者とし、決まった額の税の支払い義務をザミンダールに課すというものである。ムガル朝の制度と違うところは、税の額が固定されたことと（ムガル朝時代は、一定期間の間隔で地税の査定をし直していた）、ザミンダールに土地の近代的な所有権を与えたことである。つまり、土地は独占的にザミンダールのものとなり、耕作者はそれまで土地に対して持っていた慣習的な権利を失った。これにより、耕作者は、いつでも地主に土地を奪われる単なる小作人になった。また、地税の水準が極めて高く設定された。このため、地税をイギリス東インド会社に納入できないザミンダールが続出した。こうした土地は競売にかけられ、カルカッタなどの都市に住む商人などが購入し、不在地主による大地主制が発達した。一方、農民は高い地代と厳しい取り立てに苦しみ[注23]、不作などの年には地代を払えず耕作権をザミンダールに取り上げられて土地を失う人が増大した。彼らの多くは、高率の地代を払って又小作をするか、低い賃金で他人の土地で働く農業労働者に転落した。

こうして、英領時代のベンガルでは、零細な小作農や農業労働者が増加した。そしてセン（2000）が言うように、飢饉がおこるとこうした農業労働者が最大の犠牲者となったのである。1943年のベンガル大飢饉では、150～300万人が命を落としたといわれている（『新版南アジアを知る辞典』）。イギリスから独立した後、ザミンダーリー制度は廃止されたが、膨大な零細農と農業労働者は、現在でもバングラデシュの貧困の中核をなしている。その根源の一つは、英領時代に導入された永代ザミンダーリー制度にあるのである。

このように、現在のバングラデシュの貧困の原因として、イギリス統治時代に未開墾地が消滅する一方でその後の人口増加により農地が不足するようになったこと、そしてイギリスが導入した永代ザミンダーリー制度の影響を挙げることができよう。

(2) 工業化の遅れ

現在のバングラデシュでは、工業化が大きな課題になっている。開墾できる未開地はもはやほとんどなく、農業セクターでの雇用拡大には限度があるため、農村に滞留している膨大な過剰人口を吸収するには、工業やサービス業の拡大が不可欠だからである。では、バングラデシュで工業化が遅れた原因は、そもそもどこにあるのだろうか。

かつて工業都市として栄えたダッカ（ダカ）

本稿の冒頭で述べたように、19世紀初頭までベンガルは世界に工業製品を輸出する工業大国であった。その主な工業輸出品は、綿布と絹布であった。16世紀以降、ポルトガルやオランダ、イギリス、フランスなどが交易のためインドにやってくると、安くて質がよいインドの綿布は、アジ

アだけでなくヨーロッパにも受け入れられ、ヨーロッパでインドの綿布に対する“インド熱”を巻き起こした。ヨーロッパなどでは毛織物、麻（リンネル）、絹に代わってインド産綿布が生活のあらゆる場で使われるようになり、インドの主要な輸出品になっていく。その主要な生産地の一つがベンガルであった。特にダッカは高級綿布モスリンの生産地として知られ、世界各地に輸出するため多くの機織り職人が働く、当時としては大きな工業都市だった。1798 年にベンガル南東部の農村を視察したブキャナンの報告書（Buchanan 1992）からは、農村部の至る所で稲とともに、綿布の原料である綿花が栽培されていたことが分かる[注 24]。

脱工業化の進行

しかし、ベンガルを含むインドからの綿布の輸出は、18 世紀後半にイギリスで始まった産業革命によりイギリスが綿布の輸出国として台頭すると、壊滅的打撃を受けることになる。イギリスでは、ヨーロッパ人にとって必需品となっていた綿布を国内でも作ろうと技術革新を重ね、それが産業革命を生むことになった。その結果、機械による大量生産が可能になり、イギリスは安くて質の良い綿布を世界中に輸出するようになる。

このようにして工業生産地としてのベンガルの地位は、イギリスでおきた産業革命によって失われてしまった。イギリスの植民地であるインドに求められたのは、茶やアヘン、ジュート、原綿、藍、小麦、砂糖、絹など輸出品となる農産物の生産と、イギリス製工業製品、特に綿布の消費地としての市場であった。インド各地から輸出用農産物を集めるため、またイギリスから輸入された工業製品をインド各地に運ぶため、貿易港であるカルカッタ（コルカタ）、ボンベイ（ムンバイ）、マドラス（チェンナイ）を起点として、世界屈指の規模の鉄道網の敷設が 19 世紀半ばから猛スピードで進められた。

こうしたことから、自由貿易の旗印の下[注 25]、イギリスからの輸入製品に対してきわめて低い関税しかかけられず、安価な綿布が大量にインドに流入した。その結果、19 世紀前半のインドでは脱工業化が急速に進んだ。特に綿織物産業の衰退はすさまじく、ベンガルでもダッカやムルシダバードなど織物産業の中心地は急速に衰退した。かつてインド有数の大都市だったダッカの町の人口は 15 万から 3 万ないし 4 万に減少し、その様子を見たイギリス人は、ダッカは「非常に繁栄した町から、貧困な小さな町へと転落した」と述べている（吉岡 1975）。

インドにおける近代工業の開始と東ベンガル

そうした中でも、19 世紀半ばになるとインドでも機械を使った近代的な工業が徐々に生まれてきた[注 26]。カルカッタのジュート工業[注 27]と、ボンベイ周辺の綿工業がその中心である。このうち、ボンベイ周辺の綿工業ではインド人資本家が多かったが、カルカッタのジュート工業では、経営者はインド人ではなくヨーロッパ人であることが多かった。また、ジュート工場はカルカッタ近郊に作られたため、東ベンガルに求められたのは原料ジュートの生産だけであり、東ベンガルでは近代的な工業はほとんど興らなかったのである。

その後、綿花商から身を起こし綿紡績業に進出していたパールシー（ペルシアから移住したゾロアスター教徒の子孫）のタタが、1907 年にはインドで最初の一貫鉄鋼所の創設に成功するなど、

重工業も始まった。第一次世界大戦が1914年に始まるとアジアの戦線で必要な戦費や物資を賄うため、イギリスは自由貿易政策から国内産業の保護政策に転換する。インドが輸入する綿製品や鉄鋼などに関税がかけられるようになり、インドの工業化を進める要因となった。この結果、ムンバイ、グジャラート、カルカッタなどで工業化が進んだのである。しかしこの工業化が東ベンガルまで広がることはイギリスの植民地時代にはなかった。東ベンガルは、1947年にイギリスからパキスタンとして独立したとき、ゼロから工業化を目指すよりほかなかった。これが、今日までバングラデシュで工業化が遅れたことの、大きな原因となっている。

(3) 女性の地位の低さ

南アジアでは、女性の地位が低いことが大きな問題になっている。バングラデシュも例外ではない。バングラデシュの人口は男性より女性のほうが少なく、平均寿命も近年まで女性のほうが短かった[注28]。これは、女性が十分な食料を摂取したり必要な医療などを受ける機会が、男性に比べて少ないことを示している。また、女性の地位が低いのは、その背景に家庭や社会に対する女性の経済的貢献度が低いこと、あるいは経済的活動に参加することが社会的に抑制されていることを示唆する。実際、15歳以上の人の中で就業していたり就業する意思がある人の割合を示す労働力参加率は、男性が81.7%なのに対して女性は33.5%と半分以下にすぎない（2013年：BBS 2016）。以前は、女性の労働力参加率は、さらに低かった。この背景には、どのような文化的および歴史的背景があるのだろうか。それを、主にバングラデシュ人の宗教との関係から見てみよう。

バングラデシュ人が信仰する主な宗教はイスラームとヒンドゥー教であるが、それぞれの宗教は、男性に対し女性をどのような存在として位置づけているのだろうか。まず、イスラームについて整理しよう。イスラームの聖典であるコーランには、次のように書かれている。

「アッラーはもともと男と（女）の間には優劣をおつけになったのだし、また（生活に必要な）金は男が出すのだから、この点で男の方が女の上に立つべきもの。だから貞淑な女は（男にたいし）ひたすら従順に、、、。反抗的になりそうな心配のある女はよく諭し、（それでも駄目なら）寝床に追いやって（こらしめ、それも効かない場合は）打擲を加えるもよい。」（『コーラン』（上）、P.115）

ここでは、男女に優劣があること、また生活の糧を得るのは男性の役目で女性ではないこと、つまり、女性は収入を得るために働かないのが当然であることが示されている。また、

「これ預言者、お前の妻たちにも、娘たちにも、また一般信徒の娘たちにも（人前に出る時は）必ず長衣で（頭から足まで）すっぽり包み込んで行くように申し付けよ。」（『コーラン』（下）、P.297）

と書かれている。コーランにおける上の記述が、イスラームにおける、女性は家族以外の男性に体を見てはいけない、外出はできるだけ避け、やむを得ず外出するときはスカーフで髪を覆いベールや黒い長衣で顔や体を隠さなければならない、という女性隔離の根拠になっている。こうした女性隔離の宗教的規制は、南アジアでは、ペルシア語でカーテンを意味するパルダ（parda）と呼ばれる。

こうした男尊女卑や、女性は収入を得るため家庭の外で働くべきでないという考えは、イスラー

ムに限ったことではなく、ヒンドゥー教にも同様の意識が強い。それは、現在に至るまで権威あるヒンドゥー教の法典『マヌの法典』の以下の記述に明確に表れている。

「少女、或は若き婦人、或は老女は、何事をも独立にてなすべからず。たとへ、家庭の用事といへども。」「婦人は幼にしてその父に、若き時はその夫に、夫死したる時は、その子息に従ふべし。婦人は決して独立を享受すべからず。」「貞節なる妻は、夫を絶えず神として崇むべし。」（p. 163）

また、女性が家の外で活動することを禁じている。

「夫人は決してその父、夫、或は子息より離るる事を求むべからず。なんとなれば、彼等を離るる事によりて夫人は（自ら、及び夫の）家族をも、共に賤しむべきものとなさん。」（p. 163）。（妻の中で）、「たとえ祭礼に於ても、禁じられたるに酒を飲み、或は公衆の見世物、或は集会に赴くものは、六クリシュナラの罰金を課せられるべし。」（p. 273）。「己の妻（の収入）によりて生活すること」（は大罪に準じる重大な罪である）（p. 335）。

このように、程度の差こそあれ、イスラームもヒンドゥー教も、働いて収入を得るのは男性の役割である、男性のほうが女性よりも優れている、女性は男性に従って生活するべきだ、女性はむやみに公の場で自分の姿を晒してはいけない、という価値観を持っている。もちろん人々は、常に経典に書かれていることに従って生活しているわけではない[注29]。信仰はあくまで個人のものだし、経典の解釈や、それをどこまで社会が個人に求めるかは、時代や社会、宗派などによって大きく異なる。しかし、18 世にイギリスに植民地化されるとイギリス支配への反発が高まり、聖書を重視するプロテスタント宣教師との交流が深まるなかで、インド人の間に、聖典であるコーランやヴェーダに帰れという原理主義的な運動が高まったことは、すでに見た通りである。

（4）初等教育の遅れ

宗教と教育

バングラデシュが貧困から脱して豊かで公正な社会を築くためには、教育、しかも国民全体に公平に開かれた教育の普及が必要である。しかし、イギリス植民地時代末期のベンガルの識字率はわずか 9.4％に過ぎなかった（Chakrabarty 1992, p.176）。2011 年においても識字率（7 歳以上）は 52％（男性 54％、女性 49％）に過ぎない（BBS 2016）。パキスタン時代、そしてバングラデシュとして独立してからも、初等教育の普及、識字率の向上は、きわめて遅かった[注30]。このような、初等教育の普及の遅れはなぜ起きたのだろうか。また、大衆における初等教育の遅れと対照的に、バングラデシュでもインドでも、英語による高度な教育が一部のエリート層により進められてきた。この格差の原因は何であろうか？

バングラデシュやインドなど南アジア諸国の現在の教育状況は、イギリス植民地下の社会状況やイギリスの教育政策と大きな関係がある。それについては後で論じることとして、まず、宗教、特にヒンドゥー教と教育の関係を見てみよう。イギリス支配の下で、英語教育によってイギリス人に近づき現在の南アジア教育の基本的な枠組みを作ったのは、高カーストのヒンドゥー教徒であり、教育に対する彼らの姿勢は、多分に宗教の影響を受けていたと考えられるからである。

ヒンドゥー教の経典『マヌの法典』によれば、神（ブラフマン）はバラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラの各カースト（ヴァルナ）の職業として以下のものを与えた。「バラモンには（ヴェーダ）（聖典：須田）教授と学習、自己又は他人のための行祭、、」「クシャトリアには、人民の保護、施与、供犠、（ヴェーダの）学習、、」、「ヴァイシャには、牧畜、施与、供犠、（ヴェーダの）学習、商業、金銭の貸与、及び土地の耕作」、そしてシュードラに与えられたのは、「こららの（他の）三種姓（ヴァルナ）に甘んじて奉仕すべき唯一の職能」であった（p. 37）。このような教義を持つヒンドゥー教では、ヴェーダの学習、つまり教育を受けることは、再生族と呼ばれ征服民アーリア人の血を引くバラモン、クシャトリア、ヴァイシャにのみ認められる。被征服民の先住民族の子孫であり、一生族と呼ばれるシュードラ、そしてそのさらに下位におかれる不可触民（ダリト）や部族民にとって、ヴェーダの学習すなわち教育は不要とされたのである。

英領時代における英語教育の始まり

ムスリム支配の時代になると、教育を独占する高カーストのヒンドゥー教徒は、ムスリム政権下で公用語であったペルシア語やウルドゥー語を身に着けて支配体制の中に積極的に入り込み、社会・経済における支配階層ないし中間層としての地位を確保した[注31]。そしてムスリム支配に代わってイギリス支配が始まると、ペルシア語やウルドゥー語を捨てて英語を学び、役人や法律家、商人・金融業者、地主などの中間層として英統治下の支配・利権構造に入り込もうとしたのである。1816年には、植民地の首都カルカッタで、こうした中間層の代表者がお金を出し合い、自分たちの子弟に西洋的な学問を教える私立の学校ヒンドゥーカレッジが設立された。同様の学校は、1825年にボンベイでも設立された。これ以降、英語による教育がインドの都市部で急速に広まっていったのである。

一方統治者のイギリス東インド会社は、インド人の無用な反発を招くのを恐れ、当初英語教育を行うことに消極的であった。しかし、植民地支配が強固なものになると、1835年、マコーレーの有名な「教育に関する覚書」により、イギリスは英語教育を通して積極的にインド人の教育を行うことに踏み出すのである[注32]。イギリスが英語教育を通じて実現しようとしたのは、言語だけでなく知識や価値観をイギリス人と共有し植民地支配を低コストで支えるインド人協力者の育成であった。

マコーレーの「覚書」を受け、1837年にはインドの公用語がペルシア語から英語に切り替えられて本格的な英語教育の普及が始まり、さらに1844年にはインド人の役人の採用に当たり英語力がある人を優先的に採用することが決まった。東インド会社は英語教育を行う私立・公立の学校に補助金を提供して多数の単科大学（カレッジ）を設立させ、それらを傘下に収め統括するため1857年にカルカッタ、ボンベイ、マドラスで大学を設立した。こうして、インドにおける教育システムの形が整えられた。その後英語による高等教育機関は急速に拡大し、1921年、東ベンガルにもダッカ大学が設立された。こうして、インドで中間層として社会的に上昇しようとする人にとって英語で教育を受けることは必須条件になり、英語で教育を行う私立の教育機関が都市部で盛んに作られるようになった。これが、今でも南アジアで過剰なまでに英語教育が重視される大きな

要因になっている。

初等教育の遅れ

一方、主に母語による初等教育の普及は、イギリス統治下で、またイギリスが去った後でも、後回しにされてきた。インドの農村部には、伝統的にパートシャーラーやマクタブと呼ばれる寺子屋があり、主に男子を対象として初等教育を行っていた(注33)。イギリスがこうした寺子屋を支援しながら大衆教育を進めるのは、1854 年のウッドの教育通達からである。南出（2016）によると、ウッドの教育通達にしたがって、カリキュラムの統一、パートシャーラーの増設、補助金の供与、教員の質の改善のための研修、下層の子供たちへの奨学金供与などがなされた。

しかし、大衆向けの初等教育が、英領時代に広く普及することがなかったのは、すでに見た通りである。これは、ウッドの教育通達が出された直後の 1857 年に、イギリスの支配に対するインド大反乱が起きたことと関連がある。ヒンドゥー教徒やムスリムの上層階級も参加した大規模な反乱に震撼させられたイギリスは、大衆教育よりも上流階級の教育を重視するようになった。農村や都市下層の間に教育を広めるより、上流階級を自分たちに文化的に同化させることで味方につけ、インド統治を安定化させることを優先したのである(注34)。初等教育の普及を軽視する言い訳として、高等教育が充実すればその効果は自然と大衆に広がるはずだという論理が使われたが、それが間違いだったことは、その後の低い識字率が証明している。

1882 年には初等教育の管轄は地方自治体に移管された。地方自治体には、初等教育を充実させる財政的な余裕もなく、またおそらく上で見たように宗教にもとづく差別意識もあり、低カーストや女子を含む国民全体に初等教育を普及する努力はほとんどされなかったのである(注35)。結局、英領時代に初等教育が義務化されることはなかった。こうして、英語による教育を早くから私立学校で受けて大学まで進み、英語を武器として政府の役人や法律家、ビジネスマンなど中間層として社会階梯を登っていく主にヒンドゥー教徒の高カーストや経済的に豊かな都市上層と、多くが初等教育さえ受けられない低カーストや農村の貧困層に国民が分断される構造が生まれた。それは、英領インドがイギリスから独立した後も、インドやパキスタン、そしてバングラディシュで長く続いたのである。

第 4 節　まとめ

本稿では、社会・経済の開発において様々な課題を抱えているバングラデシュの社会の特徴とその歴史的な形成について、イギリスからパキスタンの一部として独立するまでの期間を対象として論じた。まず、バングラデシュが位置するベンガルの地理的特徴とその形成について整理したうえで、ベンガル人はどのようなルーツを持つ民族なのか明らかにした。また、ベンガル民族の基盤をなすベンガル語はどのようにして生まれ、この地域の人々の母語となったのかを歴史的に整理した。また、ベンガルでのヒンドゥー教とイスラームの関係について歴史的に整理し、現在バングラデシュとなっている地域でなぜムスリムが多いのか、なぜベンガルはバングラデシュとインド・西ベンガ

ル州という異なる国家に分かれたのか、歴史的に考察した。

そのうえで、バングラデシュが現在抱えている、或いは近年まで抱えていた様々な重要な問題の歴史的な根源について論じた。取り上げたのは、農村部に零細農や農業労働者が多く主食である米さえ輸入する状況、工業化の遅れ、女性の地位の低さ、そして近年まで続いた初等教育の遅れ、である。

バングラデシュで現在でも零細農や農業労働者が多く、食料が不足する要因は、主に二つある。一つは、16 世紀のムガル朝初期から政策的に行われた開墾と入植により 19 世紀の末までには未開墾地がほぼなくなり、その後人口が増え続けたことである。また、イギリス植民地時代に導入された永代ザミンダーリー制度により高率の地税で厳しい取り立てが行われるようになり、飢饉や不作時には土地を失い小作農や農業労働者に転落する人が増えた。こうした状況下で 20 世紀になると医療の改善によって急速に人口が増加したため食料は不足するようになり、ベンガルは米の輸出地域から、輸入地域に変わった。また、19 世紀末から過剰人口をアッサムやビルマ（ミャンマー）など周辺地域に移民として送り出す地域になった。それが、今日のロヒンギャ難民問題の一つの原因となっている。

工業化の遅れについては、大航海時代の幕開けとともに発達した世界経済システムの中でベンガルがおかれた位置と深く関係している。ベンガルは古くから米と綿製品を東南アジアなどに輸出する地域であったが、イギリスの植民地時代は、イギリスをはじめ世界中に綿織物を輸出する地域として栄えた。特にダッカ（ダカ）は高級綿織物モリスンの産地として知られ、世界の工場ともいえる工業都市だったのである。しかし、18 世紀にイギリスで産業革命がおこると、逆にイギリスから世界各国へ綿織物の輸出が始まった。そして、イギリスの工業製品は、インドを重要な市場とするようになる。自由貿易の旗印の下、大量の安価な綿織物がインドに流入し、綿織物産業を破壊した。かつて綿織物産業で栄えたダッカは急速に衰退し、東ベンガルは世界市場向けにジュートなどを生産する農業地域に転落した。19 世紀半ばからインドでも近代的なジュート産業や綿織物産業などが興るが、中心地はカルカッタ、ムンバイ、グジャラートなどであり、東ベンガルの再工業化は、英領時代には起こらなかった。現在のバングラデシュで工業が未発達な一因は、こうしたことにある。

バングラデシュの女性の地位が低いことは、男性の数が女性よりも多いこと、今世紀の初めまで男性のほうが平均寿命が長かったこと、女性の識字率が男性よりも低いこと、などに表れている。この原因は、『コーラン』や『マヌの法典』などに書かれているイスラームとヒンドゥー教の教義にさかのぼることが可能である。両方の宗教が、女性が家庭の外に出たりすることを良く考えておらず、働いて収入を得るのは男性の役目とするなど、宗教が女性の社会進出を阻む要因となっている。ムスリムもヒンドゥー教徒も実際の生活は聖典に忠実に従っているわけではないが、西洋支配への反発やキリスト教宣教師の影響などで 19 世紀初頭から聖典を重視する原理主義的な運動が盛んになり、女性の地位向上の障害となっている。

初等教育の遅れについても、宗教的要因を否定できない。ヒンドゥー教にはカースト（ヴァルナ）による差別が明確に存在し、上位カーストへの奉仕が義務とされる低カーストの不可触民には教育

（経典の習得）は必要ないと『マヌの法典』には規定されている。こうした宗教的な身分差別が、国民全体に初等教育を普及することを阻む一要因となっていたと考えられる。イスラームでは、本来信徒は平等であるはずだが、実際には、高貴な人（アシュラーフ）と庶民層（アジュラーフ）といった区別があり、ヒンドゥー教のカーストに似た社会集団や集団間の上下意識がある。また、パルダの慣習から、女性が学校に通うことは難しい。こうしたことからも、ムスリムが多い東ベンガルで、庶民や女性の教育普及は進まなかったと考えられる。

また、イギリス統治時代、イギリスは自分たちの理解者となって植民地支配を支える中間層（役人、法律家、商人、地主など）を作り出すため、英語による高等教育に力を入れた。インド人（特にヒンドゥー教の上層階級）の間では、英語による西洋式の教育を身に着けることが、社会階梯を登る手段として定着した。こうしたなかで、主に富裕な階層むけに、英語で教育を行う私立の教育機関が都市部で発達した。その一方で、農村や貧困層を対象とする公教育による初等教育は軽視されたのである。イギリス植民地時代末期のベンガルの識字率はわずか 9.4％という状態であった。独立後も、インドやパキスタン、現在のバングラデシュはこうした構造を引き継ぎ、近年まで初等教育の義務化さえされない状況であった。

バングラデシュだけでなく、どの国でも、宗教を含め社会や文化は歴史的な存在である。問題の本質を見極め、改善方法を考えるためにも、その問題がいつどのようにして生まれたのかを歴史を遡って明らかにすることには意義があると思われる。本稿は、そうした試みの一つである。なお、紙幅の関係で本稿では検討できなかったが、イギリスから独立した後のパキスタン時代、そしてバングラデシュとして独立した後、政府や社会は本稿で取り上げた諸問題にどのように取り組んだか、その結果はどうであったかを解明することも、きわめて重要である。この課題には、稿を改めて取り組みたい。

注

1．ベンガルを 7 世紀に訪れた中国の僧玄奘は、ヴァッダナ国（現在のボグラ県周辺）の地を「土地は低湿で農業は盛大である」、サマタタ国（現在のコミラ県周辺）のことを、「農業は盛大で、花・果は繁茂している。気候は穏やかに風俗は素直である。」と説明している（玄奘 1999, pp.207, 217）。ベンガルを 14 世紀半ばに訪れたモロッコ出身の旅行家イブン・バットゥータは、「そこは広大で、米の豊富な地方である。世界の中で、その地方ほど物価の安いところを、私は他に見たことがない。」と記している（バットゥータ 2001, p.358）。また 17 世紀にムガル帝国の雇われ外人となっていたフランス人ベルニエはベンガルを、当時世界で最も肥沃な国と言われていたエジプトと比べ、「あらゆる時代が、エジプトを、この世で最良で一番肥沃な国だと言いました。、、、けれども私が、二度の旅行でベンガル王国について認識できたことによれば、この優位はエジプトよりもむしろずっとベンガルに与えられてしかるべきだと思います。ベンガルは米をとても大量に生産しますので、近隣に供給するばかりでなく、非常に遠い国にまで供給しています。、、、、一言で言えばベンガルはどんなものでも豊富な土地です。」と述べている（ベルニエ 2001（第 2 巻），pp.284-286）。

2．ベルニエ（2001）は、「綿や絹が、ベンガルはヒンドゥスターン（インド：須田）全体大ムガル帝国全体のばかりでなく、近隣王国全体やヨーロッパにとっても総合倉庫と言えるほど多くあります。イギリス人やポルトガル人やインド人商人が取り寄せるものは言うに及ばず、オランダ人だけでこの土地から取り寄せ、いたる所、特に日本やヨーロッパに輸送している、上質のやその他のや染め物や白いのやあらゆる種類の綿布の量の多さには、しばしば驚きました。あらゆる種類の絹や絹布についても事情は同じです。」と述べている（ベルニエ 2001（第 2 巻），p.287）。

3．「魚とご飯でベンガル人（Machh-e Bhat-e Bangali）」という言葉があるが、ベンガル人の生活の特徴をよく示す言葉だといえよう。

4．ここでは、「民族」を、言語など文化を共有し歴史的な過程で同属意識を持つようになった人々の集団、と定義しておく。

5．しかし、ベンガル人におけるアーリア人の混血の程度は、現在のパキスタンやインド北西部に比べると相対的に低く、アーリア人流入以前の先住民の遺伝的要素が相対的に強いと考えられる。これは、北西部の人々に比べ、一般的にベンガル人の肌の色が濃く、身長が比較的低く、鼻が低く、アーリア人の特徴よりオーストラロイドやモンゴロイド、ドラヴィダ人的な特徴がより強いことなどから明らかといえよう。

6．ベンガルのムスリムは、アラブ人やトルコ人、ペルシア人などの外来ムスリムの子孫であるアシュラーフ（「高貴な人」の意味）と、インド出身の改宗者であるアジュラーフに分かれる。1872年にイギリスが行った人口センサスでは、アシュラーフに属する人は、ベンガルでは1.52％に過ぎなかった（Chakrabarty 1992）。

7．少数民族の中で多いのは、チャクマ、モグ（マルマ）、タンチャンギャなどチッタゴン丘陵部に住むモンゴロイド系の人々で、ランガマティ県、カグラチャリ県、バンダルバン県の3県で、全国の少数民族の半分強を占めている（2011年人口センサス）。こうした民族は、多くが非ムスリム（仏教徒、ヒンドゥー教徒、キリスト教徒など）である。1947年の分離独立時に彼らはインドやビルマに組み込まれることを望んだが、チッタゴン丘陵部が東パキスタンに編入されたことから現在バングラデシュの国民となっている。ほかにも、モンゴロイド系で北部に多いガロ（Garo: チベット・ビルマ語族）や、オーストラロイド系のサンタル（Santal: アウストロアジア語族）などがいる（Rashid 1991, pp.150-153、『新版　南アジアを知る事典』）。

8．マウリヤ朝アショーカ王の時代（紀元前3世紀）に石に彫られた文の断片が、バングラデシュ北部のボグラ県マハスタンで見つかっている。Van Schendel（2009, p.16-17）によると、これは石板にマガダ地方の日常語（プラークリット語）で、古代文字のブラフミー文字を使って彫られている。内容は、水害や火事、鳥害などの緊急時に備えて倉庫を米や油、木や貨幣などで満たすようにしろ、という命令だと推定されている。

9．ベンガル語がマガダ地方（今のビハール）の方言から進化し生まれたことは共通の理解となっているが、その形成時期は、文献により大きな幅がある。これは、ある言語から別の言語への進化は、断続的でなく連続的であることから、理解できることである。ある論者は、ベンガル語は初めてベンガルを統一したシャシャーンカ王の時代（7世紀初め）に成立したと主張するが、10世紀に成立したという説もある（*Britanica Online Encyclopedia,* “Bengali Language”）。なお、のちに、ベンガル語からオディアー（オリヤー）語とアッサム語が独立した。

10. 非アーリア系の民族がベンガル語を受け入れ、ベンガル人に同化していく現象は、現在も進行中である。チッタゴン丘陵地帯に多く住むチャクマ民族はもともとミャンマーのアラカン地方から来た民族でチベット・ビルマ語族に属する言葉を話していた。しかし、現在は固有の言語を捨て、ベンガル語を母語とする民族になっている（『新版　南アジアを知る事典』「チャクマ」，p. 503）。

11. イートン（1993）によると、この時期に東ベンガルの開墾が積極的に行われた背景には、16世紀の終わりにガンジス川の流れが変わり、西ベンガルを流れる川（バーギーラティ川とその下流のフーグリ川）から東ベンガルを流れるパドマ川にガンジス川の本流が移動したことがあるという。これにより、東ベンガルに大量の水や養分豊富な土壌が供給され稲作に適した土地になった。同時に、この地で作られた米をムガル帝国の拠点であるインド北西部に船運により容易に運ぶことが可能になったのである。

12. 開拓の指導者の中にはヒンドゥー教徒やキリスト教徒もいたが、その数は少なくムスリムが多かった。ヒンドゥー教徒で開墾の指導者になる人が少なかった理由を、イートンは、ヒンドゥー教が農業を蔑視する宗教だからと説明する。実際、ヒンドゥー教の法典『マヌの法典』によれば、最上位のカーストであるバラモンにとってはヴェーダ（聖典）の教授が、クシャトリアにとっては人民の保護が、ヴァイシャにとっては商業がもっとも望ましい職業である。もし望ましい職業が得られない場合は他の職業に就くことは認められるが、「農業は努めてこれを避くべし」、「（農業による）生活の手段は有徳者によりては非難せらる。」と書かれている（p.320）。こうしたことから、高カーストのヒンドゥー教徒は開拓資金の提供などで貢献したが、農村レベルで開墾の指導者になるような人は少なかった。一方、ムスリムにとって農業は、人類の始祖であるアダムに神が与えた仕事であり、土は人間がそこから生まれ死後戻る場所である。農業は神聖な職業でこそあれ、決して卑しい職業ではない。イスラム教の聖典でもある旧約聖書の創世記には、「神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた」。神は「また、アダムに仰せられた。あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」とある。

13. 現在でも権威あるヒンドゥー教の法典『マヌの法典』には、カーストについて以下のように書かれている。創造主であるブラフマンは、「バラモンには（ヴェーダ）教授と学習、自己又は他人のための行祭、、、クシャトリアには、人民の保護、、、、ヴァイシャには、牧畜、、、商業、、金銭の貸与、および土地の耕作、これらの（他の）三種姓（ヴァルナ）に甘んじて奉仕すべき唯一の職能を、シュードラに命じたり。」（pp.36-37）。「人類中の最も下級なるものたるチャンダーラ」（p. 311）。「チャンダーラ及びシュヴァパチャの住居は村の外たるべし。」「彼等の食物は（アリアン人）以外の人々により、壊れたる容器にて彼等に与えらるべし。彼らは夜、

村をも町中をも歩くべからず。昼は、彼らの仕事のために、王の命令による標識を付けて歩くべし。又親戚なき（者の）死体を運び去るべし、、。常に法に従ひて犯人の刑を執行すべし。」(p.316)。

14. ヒンドゥー教に著しい差別意識があるのに対し、イスラム教は、神の前では信徒は平等である（ただし、男女の間では、明確に男性の優位性を認めている。また、実際にはインドでもアシュラーフとアジュラーフなどの貴賤の区別が見られる）。イスラームを受け入れれば、ヒンドゥー教徒の時のような厳しい差別から解放されるという期待も、入植農民の多数を占める低カーストの人々にあったのであろう。
15. 中里（2008）でも、ほぼ同様の説明がなされている。
16. これはベンガルだけでなく、長くインド全体で見られた現象である。ベンガルと同じくムスリムが多いパンジャーブ地方の 19 世紀の社会状況を解説したチシュティー（2002）は、パンジャーブではムスリムの多くが聖者崇拝など偶像崇拝をし、ヒンドゥー教の神を信仰する人もいたことを教えてくれる。
17. 1350 年頃シレットの有名なスーフィーを訪問したモロッコ出身の旅行家イブン・バットゥータ（2001）は、「その地方の住民は、イスラム教徒であろうと異教徒であろうと、等しく彼を詣でるためにやって来て、贈り物や奉納品をもたらす」と記している（p.356）。
18. 18 世紀にイギリスで福音主義運動が活発になり、その影響でインドでのキリスト教の布教が 1813 年に自由化されると、プロテスタント系の宣教師の布教活動がインドで盛んになる。聖書を重んじるプロテスタントの宣教師との接触は、インドの宗教者たちに自らの経典に回帰することを促す契機になった（粟屋 1998）。
19. ワッハービ運動は、18 世紀半ばにアラビア半島で起きたイスラーム改革運動で、ワッハーブ（1703 - 93）が始めたため、こう呼ばれている。コーランとスンナへの回帰を求め、聖者や偶像の崇拝、スーフィー的な宗教の在り方を否定した。
20. 19 世紀に入ると、ヒンドゥー教側でも、復古主義的・原理主義的な動きが活発になった。その先駆けとなったラムモホン・ライ（1772/74 ～ 1833）は西洋文化の影響を受けた合理主義者で、彼の思想は偶像崇拝を批判し聖典のヴェーダ（特に、ウパニシャッド：奥義書）に基づきつつもイスラム教やキリスト教を取り入れた近代主義的で啓蒙主義的なものであった。しかし、その後のヒンドゥー教の改革運動は、ライの目指した方向と異なり、排他的な復古主義に向かった。現在のヒンドゥーナショナリズムの生みの親ともいえるダヤーナンダは、カルカッタを訪れ西洋的近代に触れることで、ヒンドゥー教至上主義的な復古主義の指導者となった。ヴェーダを絶対的に正しいものと考え、ヴェーダの時代に戻ってアーリアの地を再生しよう、ヒンドゥー教はキリスト教やイスラーム教よりも優れている、英語やウルドゥー語ではなく、ヒンドゥー教徒の言葉であるヒンディー語をインドの国語にしようと、ヒンドゥー教至上主義的な考えを社会に広めた（中里 2008）。その流れを汲む、イスラム教との対立をあおるヒンドゥーナショナリズムは、現代のインドで盛んになっている。
21. ネルーなどが中央集権的な統一国家としてのインドの独立を強く求める中、追い詰められたジンナーなどムスリム指導者は、パキスタン建国を目指して、1946 年 8 月 16 日に「直接行動」を行うことをムスリムに呼びかけた。これが、ムスリムとヒンドゥー教徒の間で大殺りくを引き起こしたのである。両者の殺りくは東ベンガルのノアカリやビハール、ボンベイ、連合州、パンジャーブへと拡大した。こうして、ヒンドゥー教徒とムスリムの間の対立は修復できないほど高まり、分離独立は避けられない状況になった。そして、カルカッタで起きた宗教間の大規模な殺りくはベンガルの中では少数派であるヒンドゥー教徒の不安を高め、ベンガルを分割して、ヒンドゥー教徒の多い西ベンガルをインドに編入することをヒンドゥー教徒が求めるようになった。
22. 現在ミャンマーのアラカンに住むロヒンギャと呼ばれるムスリムの言葉はベンガル語のチッタゴン方言と非常に近いことから（大橋ほか 2017）、彼らがバングラデシュ南東部のチッタゴン地方から移住した人々の子孫であることがわかる。
23. イギリス東インド会社の社員であったブキャナンは、永代ザミンダーリー制が導入されて間もないベンガルの農村を訪ね、農民の生活がいかに厳しいかを、次のように記している（Buchanan 1993）。一般的な農民が 4 カーニー（4.2ha ないし 2.6ha。Van Schendel によるとどちらが正しいか不明。）の農地を地主（ザミンダール）から借りて地代を払ったら、手元に残る生産物はごくわずかで、それだけではとても生活できない。夫は農業以外にも別の賃仕事をし、妻は綿花を糸に紡いで売ってやっと生活できる。ブキャナンが農村を視察した時はまだ未開の土地が多く、平均的な農家は 4 カーニーという大きな農地をザミンダールから借りて耕すことができた。しかし、この後人口増加により農地はどんどん細分化されて一人の農民が耕作できる農地ははるかに小さくなっていった。それにつれ、農民や農業労働者の生活が厳しくなっていったことが容易に推察できる。
24. Buchanan（1993）によると、綿花は畑作物なので、低地では、高台に作られた家の周りや池の周りの土手など洪水の被害を受けない土地で栽培されていた。また、少数民族が焼き畑農業を行う丘陵地では、陸稲など他の作物と一緒に栽培されていた。こうして栽培された綿花は農家の女性により手で糸に紡がれ、農村部や都市の機織り職人によって布に織られ、輸出されたのである。ベンガルは低湿地が多く、綿花栽培に適した

畑が少ない。こうした地理的条件が、綿織物産業の衰退に伴って綿花栽培がベンガルで衰退した原因であろう。そして、綿花栽培に代わって19世紀半ばから別の重要な繊維作物、ジュートがベンガルの主要な農作物として台頭してくる。そしてその加工品であるジュートの袋などがベンガルの重要な輸出品として定着していくのである（Chaudhury 1992）。ジュートは洪水の被害を受けにくく、低地でも栽培が可能である。しかも収穫後水の中に浸けて繊維を取り出しやすくする必要があり、大量の水と労働力を必要とする。低湿で人口稠密なベンガルに適した作物である。

25. インドの綿織物産業を壊滅させた自由貿易政策を理論的に支えたのは、アダム・スミスやリカードの自由貿易理論であった。リカードは、自由貿易の利点を、「各国がその位置、その気候、およびその他の自然的または人為的利点からみて、自国に適している諸商品を生産してそれを他の国々の諸商品と交換することによって、われわれの享楽品が増加することは、、、、人類の幸福にとって重要である。」（リカルド 1952, p. 154）と述べている。自由貿易によってもたらされる工業国イギリスと農業国インドの分業体制は、イギリス人だけでなくインドの人々をも幸福にすると主張されたのである。
26. インドの工業化についての以下の説明は、主に辛島昇編『南アジア史』に拠っている。
27. ジュートの主生産地であったベンガルの中心都市カルカッタでは、1855年に最初のジュート工場が設立されたのを皮切りに、1875年までには13の工場が設立された。工場で袋などに加工されて世界中に輸出された。19世紀後半に輸出量は急増した。戦争で使われたり、コーヒーや砂糖など農産物の保管・輸送用の袋などとして使われ、世界中で大きな需要があった（Chaudhury 1992）。
28. 2011年の人口センサスの結果によると、男性の数は7211万人、女性は7193万人で、女性のほうが少ない。また、2000年の平均寿命は男性が63.7歳、女性が62.4歳と、女性のほうが短かった。一般的には女性の平均寿命が男性よりも長いことを考慮すると、これは異常なことである。
29. ムスリムが必ずしもコーランに従った生活をしていないことは、14世紀半ばイスラム教国になって200年も経ったモルディブをイブン・バットゥータが訪れ、そこで法官として働いた時の記録から、よくわかる。
「一般に、大部分の女たちは、臍（へそ）から一番下の部分までを覆う一枚の腰巻だけしか着けておらず、それ以外の体のすべてが丸出しである。彼女たちはそのような姿で市場やその他を歩き回るので、（後に）私がこの島の法務職に任命された時そうした習慣を止めさせようとして、早速、衣服を着るよう命じたが、結局それは不可能であった。」（p. 208）
30. こうした初等教育の軽視は、1990年にタイのジョムティエンで「万人のための教育」世界大会が開かれたことをきっかけにバングラデシュで「初等教育義務化法」が成立すると、大きく変わった（南出 2016）。
31. 英領時代のインドの教育状況に関する以下の記述は、多くを辛島昇編（2004）と佐藤・中里・水島（1998）に拠っている。
32. 東インド会社の公共教育委員会の委員長であったマコーレーは1835年に「教育に関する覚書」を出し、インドにおける教育は英語で行われるべきで、その目的は「肌の色はインド人、しかしものの感じ方や考え方はイギリス人であるようなインド人を養成すること」とした（佐藤・中里・水島 1998, p. 349）。これが、英領インドの基本的な教育方針として定着し、実行されていった。
33. パートシャーラーとマクタブの教育内容は、地域言語やサンスクリット語、ウルドゥー語 / ヒンディー語、ペルシア語、アラビア語、コーラン、計算方法、生活に必要な技術や知識などである。本来パートシャーラーはヒンドゥー教徒が経典（ヴェーダ）を学ぶ学校、マクタブはムスリムが経典（コーラン）を学ぶための学校であるが、実際には宗教に関係なく生徒を受け入れていた（南出 2016）。しかし、佐藤・中里・水島（1998, pp. 372-373）によると、女性が初等教育を受けることは稀だった。その背景には、学問は男性がすることで、女性が読み書きをすると寡婦になるという考えが女性の間にまで広がっていた、ヒンドゥー教の聖典であるヴェーダは女性には教えなかった、ムスリムの場合はパルダの慣習により女性が集落の外に出ることが禁じられていたなどの事情があった。
34. しかし、英語による近代的な教育は、同時にイギリス支配に疑問を抱くガンディーやネルー、ボース、ジンナーのような民族主義者を育てることになった。彼らはイギリスの統治に奉仕するのではなく、イギリスの撤退とインドの独立を求めるようになるのである。
35. バローダ藩王国のように、開明的な藩王のもとで義務教育化がなされた藩王国もあった（1893年に実験的に始まり1906年から藩王国全体で施行された）。その影響で、初等教育の義務教育化を求める運動が民族運動家の中から起き、1911年にボンベイ立法参事会に義務教育法案が提出されたが、州政府などの反対にあい法制化されなかった（辛島昇編 2004, p.345）。

引用文献

Bangladesh Bureau of Statistics（BBS）. *Statistical Pocket Book Bangladesh 2015.* BBS, 2016.
Banglapedia（http://en.banglapedia.org/index.php?title=Main_Page）
Britanica Online Encyclopedia, “Bengali Language”（https://www.britannica.com/topic/Bengali-language）
Buchanan, Francis. Willem van Schendel（ed.）*Francis Buchanan in Southeast Bengal*（*1798*）. Dhaka: University Press, 1992.
Chakrabarty, Bidyut. “Social Classes and Social Consciousness”, Sirajul Islam（ed.）, *History of Bangladesh 1704-1971*（*Vol.3 Social and Cultural History*）. Dhaka: Asiatic Society of Bangladesh, 1992, pp. 164-203.
Chaudhury, Binay Bhushan. “Commercialisation of Agriculture”, Sirajul Islam（ed.）*History of Bangladesh 1704-1971*（*Vol.2 Economic History*）. Dhaka: Asiatic Society of Bangladesh, 1992, pp. 371-427.
Eaton, Richard M. *The Rise of Islam and the Bengal Frontier 1204-1760.* University of California Press, 1993.
Islam, M. Ataharul. “Population Growth”, Sirajul Islam（ed.）*History of Bangladesh 1704-1971*（*Vol.2 Economic History*）. Dhaka: Asiatic Society of Bangladesh, 1992, pp. 637-662.
Rashid, Haroun Er. *Geography of Bangladesh.* Second Edition. Dhaka: University Press Limited, 1991.
Van Schendel, Willem. *A History of Bangladesh.* New Delhi: Cambridge University Press, 2009.
アダム・スミス『国富論』岩波文庫、2000 年。
粟屋利江『イギリス支配とインド社会』世界史リブレット 38、山川出版社、1998 年。
イブン・バットゥータ、家島彦一訳注「第 23 章　ベンガル・アッサム地方の旅」『大旅行記 6』（東洋文庫 691）、平凡社、2001 年。
大橋正明ほか編著『バングラデシュを知るための 66 章（第 3 版）』明石書店、2017 年。
加賀谷寛、浜口恒夫『南アジア現代史 II　パキスタン・バングラデシュ』山川出版社、1977 年。
辛島昇編『南アジア史』山川出版社、2004 年。
辛島昇ほか監修『新版　南アジアを知る事典』平凡社、2012 年。
玄奘、水谷真成訳注『大唐西遊記 3』東洋文庫 657、平凡社、1999 年。
『コーラン』（井筒俊彦訳）、岩波文庫、1957 年。
佐藤哲・中里成章・水島司『ムガル帝国から英領インドへ』中央公論社、1998 年。
ジョンソン、B.L.C.『南アジアの国土と経済　第 2 巻　バングラデシュ』二宮書店、1986 年。
『聖書』いのちのことば社、1981 年。
セン、アマルティア、黒崎卓・山崎幸治訳『貧困と飢餓』岩波書店、2000 年。
チシュティー、N.A.、麻田豊監訳、露口哲也訳注『パンジャーブ生活文化誌－チシュティーの形見』東洋文庫 702、平凡社、2002 年。
中里成章『インドのヒンドゥーとムスリム』世界史リブレット 71、山川出版社、2008 年。
『マヌの法典』（田辺繁子訳）、岩波文庫、1953 年。
南出和余「バングラデシュの教育制度」、押川文子・南出和余編『「学校化」に向かう南アジア－教育と社会変容－』昭和堂、2016 年，pp.95-137。
ベルニエ、関美奈子訳『ムガル帝国誌』岩波文庫，2001 年（原著の出版年は 1699 年）。
堀口松城『バングラデシュの歴史』明石書店、2009 年。
リカードウ、堀経夫訳『経済学および課税の原理』リカードウ全集 I、雄松堂書店、1972 年。
吉岡昭彦『インドとイギリス』岩波書店、1975 年。
吉野馨子『屋敷地林と在地の知―バングラデシュ農村の暮らしと女性』京都大学学術出版会、2013 年。